

阿波ぶらり散歩 ～地域文化を楽しむ方法～

徳島経済研究所技術顧問 工学博士

西 池 氏 裕

はじめに

かつて、何代か前のNHK徳島放送局の局長が離任するお別れ会だったと思う、アナウンサーがよくやるような質問をしたことがある。

「あなたの経験で徳島とは？」

即座に彼が答えたのは、

「阿波踊り、これにつきますね。阿波踊りは全国に通用する」そしてちょっと間をおいて、「渦潮と祖谷かな」であった。私は「やはりそうですか」と曖昧な返答をして、あとは黙ってしまった。

「そうか、外の人にはやはりそのようにしかみえないのか、でもそれらは誰もが知っていることではないか」と不満を感じたのである。それと同時に、まずは土地に住む人々が自分たちの魅力や文化に気づき発信しなければならない、外部の人はそこにあるものを悪く言えば利用するに過ぎない、といわば当たり前のことを強く感じたのである。

1. 辻町ぶらり散歩：郷土を識ること

○近代がそのまま眠っている町

辻という町がある。現在の徳島県三好市の井川町の北部にあたる。1959年の4月に井川町新設にともない消失した町だ。かつて、煙草の集散地、吉野川の水運で、非常に栄えた町ということで、「ぶらり散歩」党にはわくわくするような歴史がある。揺籃期の日本近代が、そのまま眠り続けてしまったような町である。

徳島市から車で行くには、徳島自動車道を西へ行って美濃田の吉野川SAで降りることもあるが、私は伊予街道沿いに西進し途中の美馬にある川のみえる蕎麦屋で鮎や田舎蕎麦を食べたり、半田の手延べ素麺に寄ったりするのが好きだ。東みよし町には民俗資料館があり、それも楽しい。

三好市役所辻支所に併設している公民館で、岡本佳代子さんに会った。その日辻の案内を快く引き受けてくれたのである。岡本さんは辻に住んでおられ、辻の町ガイドの組織作りを中心に行った方である。小柄で柔和な感じで、地域の人望が篤く市の教育委員もなされていた。私が以前、井川を訪ねたとき付近の寺の花祭りを案内してくれたこともあり、俳句を通じて旧知の間柄である。

彼女は山登りが大好きだ。前にいただいたことのある井川町辻のまち歩きマップの最新版を持ってこられていて、

「今日は、少し高いところから眺めてみましょう」とお誘いくださった。

井川町辻のまち歩きマップ



「どこですか」

「石光山で穴薬師というところです。辻を俯瞰するには、イチオシポイントです」

私のいう「ぶらり散歩」マップの最新版を持って私たちは出発した。

○煙草の銘のこと、お夏煙草のこと

「辻は煙草で栄えた町です。だから、ガイドマップも『阿波煙草の道を辿る』にしました。」と岡本さんはいう。付近の煙草の葉を一手に集め、刻み加工をして、全国に遠くは北海道まで売りさばくという家内制手工業を辻は発展させた。

「江戸時代から辻は刻み煙草が盛んだったのですよ。ここで加工して吉野川の水運を利用して全国へ送り出す。職人が多く集まり、商取引もあり、またそれを目当ての店もできるということで賑やかだったのです。このあたりなどは、道の両側はいろいろな商店がぎっしり並んでいたそうです」、川湊なので歓楽街的な場所もあったろう。辻町は商都でもあった。

確かに道の両側には、うだつや虫籠窓のある旧家がある。でも今は、その繁栄ぶりを想像するのも困難なほど。商店もめったにない。

「今日は、ご精がでますね」、岡本さんは出会う人ごとに気安く声をかける。坂の途中の家の車庫のようなところで、一人の男性が木を削って鳥の形を作っている。

「この間見せていただいたのは雀だったけど、これはなにかしら」

「少し小さいから山雀にするよ、この間から家に来ているし」

山田さんと紹介された男の方は、ちょっと待ってという手ぶりをして奥へ引っ込んでいった。

「ほら、新工夫の餌台、ここから木の実をつつく」と、ペットボトルを加工した餌台をみせてくれた。山本さんは二代つづいたJRマン、昔流にいうと国鉄マンだったそう。今はもう退職してタイムカプセルのような町で自然を相手に暮らしている。

喫煙をする人は激減している。産業と呼べるかどうか分からないくらいだ。今後も伸びることはあるまい。辻町は煙草の近代化に栄え、また、劇的に歴史の表舞台から退いた町である。

コロンブスが煙草と梅毒を一緒にヨーロッパに伝えたというのが通説。日本へは1549年にザビエルが上陸した時に吸っていたという記録があるのでおそらくそれが日本人の最初にみた喫煙だろう、種子島に鉄砲と共に伝わったという説もあるが、どちらにしてもそう変わりはない。それから40年少ししか経過していないが、大阪城で豊臣秀吉や淀君はぷかぷかと喫煙している。さらに驚くことに、1609年には徳川幕府から最初の禁煙令がでている。禁止令の理由はともかくとして、喫煙の風習はまたたくまに大衆化したということだろう。(ちなみに梅毒はそれより早く、1512年に三条西実隆によって唐瘡として記録されているから、そちらの方が世界をかけめぐる速度が大きいので凄い。)

日本の葉煙草栽培の始まりも諸説があるが、これも、あつという間に全国に広がったのに違いない。ここ徳島の場合は、阿波葉と呼ばれ、江戸時代慶長年間頃から三好・美馬両郡の山間部で葉煙草の栽培が盛んであった。

阿波煙草は火付きが良いので全国的にも評判で、特に「お夏たばこ」というのは香りもよかったそう。お夏さんは祖谷の京上の実在の寡婦である。自分で葉煙草をつくり、刻み、行商したそう。働き者で人気者の女性だったに違いない。

お夏さんの作った刻み煙草の香りの良さは、特別だったらしい。なんでも数百メートル先からでも吸っていることがわかったそうで、今でいえば、パイプか葉巻のような感じだったのだろうか。「お夏たばこの香りの秘密はドクダミの生えている畑で栽培したからですよ」、あるたばこ通が教えてくれた。そうかもしれない、昔私もパイプ煙草を吸っていたが、あれには葉草の混じっているブレンド銘柄がいろいろあった。

1850年にお夏さんは亡くなったそうだが、そ

のあと辻町の商人が「お夏煙草」と名をつけて売り出し、おおいに儲けたらしい。さすが、商人の町辻だ。

当時の煙草の主流は葉巻でも紙巻煙草でもなく刻み煙草、煙管で二、三回吸ってはボンとやるあれだ。今ではあまりみられなくなった。

「刻み煙草に銘柄をつけて売ようになったのは、辻の発明です」、岡本さんが歩きながら説明をしてくださる。「このこともガイドをするときは言うのですよ」、確かに商品のブランド化は良い感覚だ。

辻の刻み煙草は評判が良かったので、他の産地のものと差別化するように初めてブランド名をもちいた。寛政年間に、辻町のお福古郷七右衛門という人が、仙花紙の角型の包装紙に『蔓橋』と銘打ったそうである。その後は競って煙草屋は商標をつけ、主なものだけでも『太平楽』『東雲』『高德』等々数十種に及ぶ。しかし煙草が専売になってからそれまでの銘柄は廃止となり、新たに阿波刻の「はぎ」「なでしこ」「あやめ」となったそうである。私の年代なら『桔梗』など、うっすら記憶のある方もおられようが、今はJTの国産では『小粋』しかない。

○刻み機の発明

「クイズがあります」、岡本さんがいたずらっぽく笑う。

「刻み煙草の生産をするために、いろいろな技術的な工夫がなされました。なかでも内田久米蔵という辻の大工さんが、カンナ刻みという道具を発明して、これが生産量も質も向上させることになりました。久米蔵さんは大阪で見たあるものをヒントにしたのですが、それは何でしょうか」というものである。

家内制手工業の発達時には、生産量の増大に対応して様々な相違と工夫が重ねられ、それが動力革命と合わさり、産業革命を支えていくことになる。そういう工夫の一つである。

カンナ刻みというのは、葉の大きさを揃えて束にしたものを、メ台という道具で圧縮してブ

ロック状にする。そのブロックをカンナ掛けのようにすると、猫の毛のようにやわらかな刻み煙草の葉が得られる。カンナ刻みという道具の効率的なところは、この煙草葉のブロックを台に設置すると、あとは足でレバーを操作すると歯車等の仕掛けで、100 ミクロンの単位でせり上がるようにしたことだ。手と包丁で刻むより圧倒的に精度よく速い、すばらしい発明だ。

この発明は、安永5（1776）年に辻町のからくり好きの大工内田久米蔵が、伊勢参りした際に大阪で見た昆布づくりの機械を参考にしたのだそう。

「ですが、実は発明者に関してもう一説あって、それは池田の中村武右衛門という人だというのですが、どう思われます」、岡本さんはニコニコ笑いながら言う。

「そうですね、昆布は消費地近くで加工するような気がしますね。北海道で加工してから輸送するというのでは、あまりピンときませんね」と曖昧な返事をしたら、少し岡本さんは不服そうな顔をした。

池田の中村武右衛門が、1800年に北海道の昆布刻み機を取り寄せて池田の大工滝下伊之助に作らせたという説で、当地では古くから信じられているという。一方の辻町内田説は、昭和50年頃に日本専売公社研修所長の奥田雅瑞が発表したという。これが現代なら、実用新案特許の抗争になるところかもしれぬが、もう特許権も切

煙草刻み機（かんな刻み機：阿波池田たばこ資料館）



れる昔の話、どちらでもいいのではないか。たぶん両説とも事実にかぎりなく近いと思う。むしろ、元祖争いをするぐらいの方がその技術の価値が良くわかるし、宣伝にもなる。

○繁栄期の刻み煙草、養蚕

「ここが蓬莱橋。辻の入り口です」。橋の親柱には「池田町へ七. 一一五軒」と彫ってある。私はスマホを操作して少し町の歴史を拾い読んだ。

江戸期『元禄郷帳』によると、井内谷では葉煙草の栽培が盛んで、延宝年間(1673 から 81)頃に始まり、元禄 13 (1700)年頃には専門の刻み業者が出現したという。

祖谷、山城、吉野川兩岸の傾斜地は葉煙草栽培に適しており、それらを池田と東井川の商人が買い集めて剪台で加工して、水運で徳島に運び、遠くは北海道にも出荷した。しかし天明の飢饉のあと享和の強訴、天保の辻町騒動、上郡一揆と、農民騒動があり、藩や特権商人たちへの不満は渦巻いていたようだ。それでも幕末の頃には、辻町には商家 400 戸余りが立ち並び、交通の要所、集散地であり、物産には煙草・葉藍・清酒・味噌・醤油・鎌・鋏などがあったという。

明治 24 年の県統計によると、県下の刻み煙草製造業者は 36 戸、うち 24 戸は池田町、井川村は 11 戸で他の一戸は美馬郡にあった。

「まあこんな細長く小さい場所に、ずいぶんたくさんの方がひしめきあっていたんですね」、私が改めて驚くと、

「ほらごらんなさい。この家の建っている土地すごいでしょ。ここは町のアイスクャンデー屋さんがあった処で、奥の方までアイスクャンデーを作る箱だったっけ。夏泳ぎに行ったときに食べるのが楽しみでした。」

驚いたことに、それは幅が 2 メートルあるかないかの超スリムな敷地の建物。仁木菓子店というのだそうだ。まあ細長く狭い土地に建てたものだ。

煙草工場に働く人が住んだという、このあたりではめずらしい四軒が一棟になった割長屋があったが、これも土地の有効利用だ。江戸の長屋も四軒が標準だ。

○辻の落陽：明治 37 (1904) 年「煙草専売法」

辻の刻み煙草の最盛期は明治 37, 8 年頃である。

明治 31 (1898)年に葉煙草専売法が実施されて、たばこ産業の環境は変わり出す。

嗜好品で税収を増大させるのは、どこの国でもよくやる。多くの場合ブラックな世界を増長させることがある。日本も例外ではない。明治政府は税収を増大するために、明治 9 (1876)年に「煙草税則」で営業税と商品個々に印紙税を課し、同 16 (1883)年、21 (1888)年の改正を経て、同 31 (1898)年に「葉煙草専売法」を施行した。

小さいころ読んだ宮沢賢治の『風の又三郎』の一節を思い出す。

・・・みんなは学校の済むのが待ち遠しかったのでした。五時間目が終わると、一郎と嘉助と佐太郎と耕助と悦治と三郎と六人で学校から上流のほうへ登って行きました。少し行くと一けんの藁やねの家があって、その前に小さなたばこ畑がありました。たばこの木はもう下のほうの葉をつんであるので、その青い茎が林のようにきれいにならんでいかにもおもしろそうでした。

すると三郎はいきなり、

「なんだい、この葉は。」と言いながら葉を一枚むしって一郎に見せました。すると一郎はびっくりして、

「わあ、又三郎、たばこの葉とるづど専売局にうんとしかられるぞ。わあ、又三郎何してとった。」と少し顔いろを悪くして言いました。みんなも口々に言いました。

「わあい。専売局であ、この葉一枚ずつ数えて帳面さつけでるだ。おら知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」みんな口をそろえてはやしました。・・・

この場面は、強く印象に残り、まだ見たことのない煙草の葉にあこがれを持った。それと同時に、専売局という言葉に底知れぬ恐ろしさを子供心に感じたものである。たぶんこの時代の人々の国家に対する感情の一面をも反映しているのだと思う。

ところで、明治政府の煙草政策にはもう一つの圧力がある。明治 31 (1898) 年の「葉煙草専売法」は日清戦争後の財政的要請での施行であった。しかし、この種の法制はブラックな面を横行させる。葉煙草の密耕作や横流しが横行することである。

このあたりの状況を『辻風土記』は、＜暗雲低迷殺気横溢の葉煙草時代＞と表現している。この制度により、従来耕作人から製造人へ直接売り渡されていたルートが、耕作人はひとまず専売局に納入して、局は従来の製造高に応じて製造人に払い下げることになる。当然製造人は、自社ブランドにふさわしい品質が保証しかねることになり、死活問題である。そのため、自ブランドの信用を守るために、密売に走ることになるのも必然の成り行きだったのである。当時の専売局長であった平尾は、夜間密売買の行われる地域をピストル携帯の局員に巡回させ、また密売人達も武装し、実際に衝突も繰り返されたことが記録されている。この悲劇的な状況は次の局長となり、製造人との間に協定が結ばれ落ち着いたという。

しかし、国家の意向が地域の努力等を見捨てて進行する時代である。決定的な辻町の経済環境変化は、明治 37 (1904) 年の「煙草専売法」施行からはじまる。それまでの煙草税制で期待した税収成果を得られないことを悟った政府は、原料葉たばこの買い上げから製造販売まで国の管理(製造専売)で行うことにしたのである。つまり、国が煙草製造を管理するのである。それには、欧米のたばこ資本が国内のたばこ産業を

独占する恐れや、日露戦争の戦費を調達する必要も圧力になっていた。また、刻み煙草に替えて、紙巻煙草がモダンな嗜好品として流行し始めたことも大きい。誰もとどめることのできない世の中の動きともいえる。

実際の辻町の繁栄の頂点は「専売法」施行の明治 37 年や 38 年のころである。『辻風土記』は次のように語る。

・・・明治三十七八九年頃辻町の殷盛さ、煙草専売法しかれても官庁が猶工場の設備完成の間煙草製造は辻の煙草屋に委託製造されたので町の工場から勇ましい刻の音が騒然としてきかされる之れに通勤する男女職工の朝夕の行き通ひ、加ふるに才長谷に分工場がありて町の勢をあげたものだされどしばらくにしてこれも池田専売所へ全部引き上げられて後といふもの俄かに寂莫となつてしまつた。・・・

専売工場が池田に移っていったら後はどうしたのかと、当然考えてしまう。経済環境の変化で、人間が移動するのは早いともいえるし、ゆっくりだともいえる。当然新たな活路に向けた経済活動を模索もする。

ここで、徳島の養蚕についてふれておこう。

日本の絹糸産業の典型的な動向とほぼ同じであるなら、ここ辻町も日本の産業の近代化の旗手の役割を担ったはずだけれども、どうだったのだろう。

近世から近代にかけて徳島の経済力を支えた藍といい、その退潮を補うがごとく盛んになった製糸産業といい、日本の近代の黎明期は地域に於ける産業を土台として成長し、また地域に於けるそれらの産業を工業化がさらに高度化するときに置き去りにしていった。そういう歴史を、我々はしっかりかみしめなければいけない。徳島の場合、明治半ばに 600 町歩であった桑畑が、明治 40 (1907) 年には 3000 町歩に増大している。明治 40 年代に入ると製糸工場建設ラッシュの時代に入り、全国に名の知れた筒井製糸工場が創立されたのもこの時である。生糸生産量は昭和初期にピークになり、その後減少する。

世界恐慌の影響による米国への生糸輸出減少のためであった。また、その後ナイロンの登場等、技術革新や社会情勢の変化によって、生産量が過去の繁栄した時代に戻らなかったことは、藍産業の場合と同じである。

徳島の場合、藍畑から桑畑への転換という形が主流であったので、主たる繭の生産地の伸びは吉野川中流以下の地域である。つまり辻町付近はその中心付近とはいえないが、それなりに生糸は景気を支えたのではないか。

もともと、辻町の近辺の養蚕は盛んである。文化期(1804 から 18 年)に西井川や中村地区で本格的な養蚕が始まり、佃地区(西井川)では佃紬の家内工業が有名だった。ただ、この地区は第一次大戦終戦時に繭の価格が大暴落をしたおりに大打撃を受けた。大正 14(1925)年と昭和 5(1930)年の売り上げを比較すると、春蚕の売り上げ 51,515 円(4515 貫)が 24,000 円(6303 貫)に、秋蚕の売り上げは 24,000 円(6063 貫)が 9700 円(4600 貫)に下がったという。

きっと、この辻町は繭や生糸の集散地で鉄道が引ける(川田 - 阿波池田間が大正 3(1914)年 3 月開業)までは、湊ものにぎわっていたと想像される。このあたりのこと、繭をどこから仕入れしていたか等を筒井直典氏に教えを乞う予定だったが、数年前に亡くなられたので機会を失って残念である。

○町の経済力

「この川の上流に、徳島の最初の水力発電所がありました。そこで使用していた発電機はドイツ製でその会社の生産第 2 号機だそうです。明治 41 (1908)年には、辻と池田に電気が灯りました。」

「近代化という意味で、当時の町の経済力を感じるためには、どういう有形の遺産が残っていますか」、少々抽象的な質問をしようと思っていたら、岡本さんはそれを察してくれたらしい。

辻と池田に電灯が早く灯ったのは、明治 39(1906)年に刻み煙草工場主たち 12 名が出資し

て辻町水力電気(株)を創立したおかげである。後の大正年間、此の会社は四国水力電気会社に合併されるが、それまでこの地域に電気を点し続けたことになる。

日本で最初に電灯が灯ったのは、明治 11(1878)年虎ノ門の電信中央局開業の日だった。電力会社による点灯は明治 21 (1888)年で鹿鳴館が最初。営業用の送電が始まったのは明治 23 年という。水力発電では明治 21 年 7 月に宮城紡績が設置した三居沢発電所(5kW。仙台市)で自家用発電を開始し、一般営業用には明治 24 (1891)年に蹴上水力発電所(水路式、直流、160kW。京都市)が、運用を開始した。

辻町の水力発電所は四国では早い方ではないだろうか、その発電機が今どこにあるか知らぬが、産業遺産として保存してもいいのではないか。

「レンガ造りの建物の一部は昭和の初期まで残っていたそうです。発電機はどこかにあるときました。」ということである。

辻町の町筋は、ほとんどが「しもた屋」だが、入り口に立派な青石を使うなど往時の繁栄を偲ぶことはできる。この地域一帯で特徴的な「うだつが上がる」の語源となったという屋根の上の装飾的防火壁「うだつ」や虫籠窓等も、この町ではあまり手を入れずにごく自然な形で、(ということは壊れかかって)、残っている。このままいくとしだいに取り壊されて消滅するのではないかと、岡本さんは心配を語ってくれた。

「この家の白壁は墨で汚れたようにしてあるでしょ、あれは太平洋戦争中に空中から目立たないように、つまり敵機に攻撃されないように、白壁をわざと汚したそうです」

確かに壁に落書きのような汚れがある。70 年前の戦争の痕跡が昨日のように、こんな形で残ったりしているところもすごい。

「この建物は頑丈そうでしょう、土佐の四国銀行の支店があったところです」

なるほど今は徳島新聞の販売店が入っているようだ。重たくてやたらに頑丈そうなドアを開

いて中に入ったところに大きな大理石造りのカウンターがある。たしかにこれは銀行のつくりだ。

出る時玄関の上をみあげると、昔そこにあった四国銀行の看板の文字がそれと読めるくらいに少し汚れとして残っている。

「以前ある先生が町並み調査に来た時にこの文字の痕跡を発見して、わあ、こんなところに四国銀行があったのだ、さすが、と感心したのですよ」、と岡本さんはどや顔で指差した。

当時はモダンだったのだろう。石垣の上に立っている四国電力の旧社宅もなかなか変わっている。

○教育熱心

辻の町は商業資本が蓄積されたせい、昔から芸事が盛んである。さらに、いわゆる民度が高いというのであろうか、教育に対する関心、力の入れ方も非常に強かったことは自慢しているのではないだろうか。

辻町が教育に如何に熱心であったことをうかがい知るエピソードがある。今回の「ぶらり散歩」の出发点になった三好市役所井川町支所のすぐ前に、辻小学校がある。辻小学校の子供は実に行儀が良い。見知らぬ私が一人で歩いても、「こんにちは」と挨拶の声をかけてくれる。外来の人はすぐ気が付くのだが、徳島県では多くの生徒が道で丁寧に挨拶をするので気持ちが良い、特にそれを辻町で強く感じるのは町がコンパクトなせいかもしれぬ。

その辻小学校の校庭に面白い碑があるので是非見ろと勧められた。学校に入るのに特に柵など設けてないので、「入らせてもらいます」と誰に言うことなく入ったところにある碑と説明を読んだ。

実は辻町の煙草製造業者には先に述べた明治31（1899）年の「葉煙草専売法」の実施にともない「特別払い下げ金」として11,400円が交付された。現代の価値にしていかにほどになるのだろうか。そのうちの1,400円を井川村内5社の修理

費に当てたというから、結構大きな金額に違いない。辻町の中心部にある今宮神社は、『本殿』『拝殿』『神門及び瑞垣』が国の登録有形文化財に登録されているが、現在の社殿はこの払い下げ金を充当して建設したという。

驚くべきは、辻町の人たちは、この払い下げ金の大半である1万円を教育費に充てたということである。明治初期の旧長岡藩に「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」という小林虎三郎の言葉で有名な「米百俵」の話があるが、それを彷彿とさせる。

教育基金の碑（辻小学校）



「徳島版米百俵、あるいは規模からいったら、もっと上かもしれない」、そう呟いて、しばし私は唸ってしまった。

「だから、辻小学校には三好郡の学校で最初のプールがありました」、また岡本さんが気持ちの良いどや顔をした。

○水運と渡し舟 平田船

草だらけの道を川へと下る。降り際の小屋の中で面白いものを発見した。青色の木の箱でア

アイスキャンデーと書いてある。

「あの箱に、仁木と書いてありますよ、さきほどの仁木のアイスキャンデーでは」

「驚いた、こんなものが残っていたのね。これはこれは驚いた」、岡本さんは少女時代に戻ったような顔して喜んだ。こういうものも、誰かがどこかに管理・保存しておかねば消滅してしまうに違いない。

アイスキャンデーの木箱



「この辺りは店屋が多かったそうですよ」、そう言われても想像できない。

坂道を川辺へ降りきると、「史跡辻渡し跡」と刻した石の碑が立っている。

「朝晩ここから工場に通う男女が乗り降りして、それはにぎやかだったそうです。」

対岸からも通う人がいたわけだ。

「それに箸蔵寺にお参りする人も渡りました。」

箸蔵寺は対岸にある山の上のお寺でロープウェイを使っても登れる。真言宗御室派別格本山で、山号は宝珠山。本尊は金毘羅大権現で、讃岐の金毘羅さんの奥の院でもある。伝承によれば、四国を回り修行を積んでいた空海に金毘羅大権現が現れ「箸を挙ぐる者、我誓ってこれを救はん」というお告げを授けたという。そこで、空海は自ら金毘羅大権現の像を刻み堂宇を建立したというのが由縁である。現在の住職は佐藤盛仁さんとおっしゃられ、私の尊敬するお坊様だ。仲間と時々説教と精進料理をいただきにお参りする。「食と命」をテーマにした説教がやさ

しくて面白い。先だって、若狭の小浜で箸を求めに入った店で、その主人と箸蔵さんによくお参りに行くという話で盛り上がったことを思い出す。

「湊もここらあたりにあったそうです」

岡本さんの指差すあたりは緑色片岩がところどころ剥き出しになっており、地質学的にもおもしろそうだ。また、川砂が洲のようになっているところもある。

「川幅はそんなに広くないですね」

「私たちは向こう岸までよく泳ぎました。小さい頃はすぐ岸のそばの水溜り、すこし大きくなるとその外側、経験で泳ぐところが決まっていた、それで疲れたら、あそこの岩で寝っ転がって」、懐かしそうに説明してくれる。原風景とでも呼べそうな、ノスタルジックな光景が目につく。

「渡し舟は無料です。船頭も県の職員で何人かいました。あそこに小屋があって。子供達は用が無くても何度も船で行き来をして、でも怒られませんでしたよ」

今では、湊という賑わいをイメージすることはむづかしくなった。でも、村の渡し舟というにはぴったりの風景だ。

平田船（山下待夫「辻風土記」）



湊には平田船という帆掛け船が行き来していたそうだ。今は池田の煙草資料館にある模型か、絵やわずかな写真でしか、当時の美しい姿を想像することができない。

○吉野川の夕日

だいぶん歩き疲れた。でも岡本さんはもう一か所、元々の今日の目的地である石光山穴薬師を案内したいといってくれる。彼女は数年前大病を患っているの心配だが、とことん親切なのが阿波女の気性かもしれぬ。

「石光山は山の上です。階段は136段ありますよ」

さすがに岡本さんは昔から山歩きで鍛えている、しっかりした足取りで階段を昇っていく、こちらの方が先に顎を出している。

石光山といういわれは、この山から水晶が採れたのだという。

「穴薬師というのは？」

「今にわかります」と言われたとおり、昇りつめたところに大きな岩があって、そこに子供が入れるくらいの割れ目が開いている。

「ここで昔、修行したとか、穴はずっと上の方へつづいているそうです」

穴のそばに小さな句碑が建っている。

「辻町は裕福な商人が多かったので、芸事・俳句などが盛んでした。ここにあった寺の解体の時には、膨大な数の俳句の記録や短冊がでてきたそうですよ」

確かに撫養にしろ、辻町にしろ、近世後期や近代初期に裕福だった土地では俳句が盛んだった。

自分たちの句ではなく、芭蕉の句碑というところが、当時の俳句人たちの考え方を反映しているのだろう。別に芭蕉本人がここに旅してきたというわけではなさそうだ。芭蕉の句碑は全国至る所にある。

ようやく本堂のある平らなところに辿り着いた。

そこは、山の中腹にある見晴らしの良いところである。半鐘がぶら下がっているのは、きっとここは火の見もかねていたのだろう。私は石に腰かけてしばらくは遠望していた。

気が付くと、一人の細身の老紳士がそばに立っておられる。立っているというより、いず

こからともなく、時空の外から現れて浮いているという感じで、まるで木の精のような方だ。岡本さんとは旧知の間柄のようでもあり、一言二言交わした後、私に自己紹介をなされた。

「山下といいます。辻で小さい雑貨商をしています」と老人は名乗られた。立派な口ひげを蓄えられ、黒い丸眼鏡をしておられたような気もするのだが、そうでなかったような気もする。不思議と顔の印象に関する記憶が定かでない。

老人はここに時おり登ってきて、眼下に見える吉野川をじっと眺めるそうだ。すると、いろいろ時の移り変わりが目の前にあるがごとく脳裏をよぎるのだそうだ。

私の横に立って遠くを見ながら、しばらく老人は昔の辻町の繁栄や吉野川の水運のことを話してくれた。最後に、しみりと次のように言われた。

「住む人にとって町や村は自分の家なのです。家が長く続くと、その家の正確な歴史が伝えにくくなるように、村や町の歴史もしだいにわからなくなります。そして、その町の歴史を正確に伝えられなくなると、その土地への愛着も失われます。だから、そうならないように町や村の歴史はきっちりに残して伝えねばなりません。特に辻のように栄枯盛衰が短期間に起こったところは、そうです。町や村の歴史は愛郷心を育てるだけでなく、他の土地の住民にもなにがしかの思いを伝えていくものだと思います。ほらごらんさ、川上のほうを、夕日に輝いている白い帆掛け船が見えるはずですよ、あれが平田船です」

私は急いで立ち上がり柵のそばへと駆け寄った。川面が鋭く光っているが、どうも船の姿は見当たらない、川下の方へ首をめぐらしたが、見つからない、西の方は雲があって不思議な赤黒さだ。

「平田船はどこでしょうか」、遠く沈みゆく太陽を眺めながら私は問うてみたが、返事がない。聞こえなかったのかと思い、また問い直して振り返ったら、老人の立っていた辺りから向こう

は少し薄暗く、目をこらして境内をみても老人の姿が見当たらない。

「あれご老人は？」

少し離れたところでやはり西の山をみていたらしい岡本さんは、質問に何も答えず怪訝そうな顔をしたので、私も黙ってしまった。

まだ浅い春の太陽は、うっすらした雲の向こうでもう山に沈んだのかもしれない。人と魔が会おう時刻だ。だが、吉野川の川面はまだ明るく輝いている。

「天気が良かったら、もっと真っ赤な空がみられるですよ」、岡本さんの顔もなにごともないように輝いていた。

2. 国府町ぶらり散歩：郷土を識ってもらうこと

○ぶらり散歩の目的

県外あるいは国外の人が徳島に来た時、案内する場所選びはそれなりに気遣う。私の友人には俳人が多い。彼らは旅好きが多く、観光ずれをしているのでなおさら案内には気遣う。このごろ私は徳島市内でよくぶらり散歩をする中で、気に入っている場所を彼らの徳島エンジョイコースの一日に入れるように考えている。もちろん県内の俳句仲間にもお勧めできるコースだ。

先日も東京など県外からの人を含めて20人ほどで「阿波こくふ街角博物館」を中心とした地域を巡って、一日を楽しんだ。まあ、俳人というのは甲羅を経た喰えない人が多いので本心かどうかかわからないが、異口同音に「よかった、徳島のおもてなしを味わって感激した」といつてくれたから、まんざらお世辞だけではないと思いたい。

この「阿波こくふ街角博物館」に関しては前号の『徳島経済 vol.101』でも紹介したが、「——みて、さわって、つくらんで——」をキャッチコピーとした「エコミュージアム」である。

少し「エコミュージアム」について述べよう。

ある辞書(ニッポニカ)によると【エコミュージアムとは、ある地域環境全体を博物館 museum と見立てて行われる諸活動であり、そのための社会的装置といえる。文化財の保存・展示を行う建造物としての博物館をさすのではない。エコミュージアムは、地域社会の発展に寄与することを目的にしている点、博物館の建物内に場を限定せず、地域内に点在する「遺産(エコミュージアムにおける遺産とは、人と環境のかかわりを表現する自然遺産、文化遺産、産業遺産のことである)」や「記憶」を対象とし、現地保存を原則とする点が、従来型の博物館と大きく異なっている。】とあり、全く私のぶらり散歩の精神そのものに近いので、「阿波こくふ街角博物館」を私は大いに気に入っている。

ところで、今まで訪れたいくつかのぶらり散歩の経験をもとに、現在の技術力に加え財政力でも少しがんばればこんなこともできると、この俳人たちとのぶらり散歩で考えたことを内容に織り交ぜて述べることにする。だから実現可能だが実現していないモノコトも混在していると思ってほしい。

○藍染体験

最初に小型の貸し切りバスで到着したのは、伊予街道沿いにある「阿波の藍染しじら館」で屋号は藍布屋、らんぷ屋と読む。到着時間をスマホで連絡しておいたおかげだろうか、国道脇にとめたバスを降りると、何人もの町歩きガイドの

藍甕（藍布屋）



方たちが待ち構えていてくれる。地域の顔見知りの俳句仲間のSさんも駆けつけてくださり、危ない国道の横断を交通整理してくれる。古今亭志ん朝も高座で言っていたが、こういう出会いの瞬間というのは土地の印象を方向付ける大事な瞬間でもある。

阿波しじら織という織布がある。織布の経糸の張力差を利用していわゆるシボという凹凸を作り、外観と肌触りをよくしたもので、明治維新の頃海部ハナという人が発明したという。阿波正藍しじら織は、そのしじらを阿波産の藍で染めたもの。実に風合いも肌触りも良いので、私も特に県外に行くときはしじらのシャツを着ていくことが多い。

そのしじら織の工程と藍染を、この「阿波の藍染しじら館」では見学することができる。何よりも楽しいのは自分で藍染を体験できることである。

藍布屋の女主人は岡本比呂さんという。俳人でもある。今日はハンカチにそれぞれ自作の句を染めよう、ということで、用意万端整えて待っていてくれた。皆それぞれ大喜びで少し勝手は違うが、溶けた蠟を含ませた筆で思い思いの自慢の一句を書きつけたのはいうまでもない。

無論、藍甕の匂いなど嗅いだことのない人がほとんど。ハンカチをおそろおそろ甕に漬けては引き上げ、そのたびごとに色が変わってくことに、全員きゃあきゃあと声を上げて無事に染め上げた。あとは水洗いして乾燥するのを待つだけ。その間、何色もの糸が張られた織物機械の見学や藍染製品の買い物をしたり、休んだり。

「藍産業というのは近世に家内制手工業として成立したということや、阿波商人はそのころ大きな資本を蓄えて、日本の産業の一報の旗頭だったことなどが分かるようにするとおもしろいよね」と岡本さんにいうと、ふむふむという顔をして聞いてくれる。

「できたら、休む時間あるいは染め物をする前に、ざっとした阿波藍の歴史とか、藍玉づくり

の労働の話とか藍染の方法の話がここに座ってビデオで見られるとおもしろいのだが」そう思いながら岡本さんが淹れてくれたおもてなし珈琲を啜っていた。あるいはスマホの動画で見られたらいいかも。すでにあちらこちらの観光地では、教育委員会や観光協会が作ったそのようなシステムが出来上がっているのを思い出したりしながら。

○天狗久

藍布屋さんから歩いて行ける距離に、天狗久資料館がある。初代天狗久は、阿波ではたぶん文楽の大江巳之助よりもはるかに人気がある人形師である。人形師とは人形浄瑠璃や文楽の頭を彫る職人のことだ。初代天狗久はもう故人であるが、生存中から名人として知られ、特に小説家の宇野千代が1947年に『人形師天狗屋久吉』を著わしてから県外でも有名になった。俳人では、かつて臼田亜郎が徳島に来た際、弟子を連れて天狗久の工房を訪ねて、弟子たちに「俳句に迷ったら、天狗久に聞きに行け」といったという伝承があり、私も随筆に書いたことがある。その天狗久の工房が、今では天狗久資料館として開放されていて、見学ができる。でも屋内は俳句仲間が半分入るともう満員。半分は周囲を散歩する。

資料館の中は仕事場がそのまま保存された状態で生活感もあり、とても感じが良い。ここは少しずつ展示が充実してきているような気がす

木偶（天狗久記念館）



る。狭い座敷だが10人ほどが座り、天狗久のドキュメント『阿波の木偶』を上映したり、木偶頭の模型を動かして楽しむことができるのが良い。

同行した県外者が「ちょっとでも実演してくれたらいいのにね」といていたが、前の庭で観客が立ち見をして箱回しを演じたり、あるいはビデオでいくつかの演目を演じたりすることならできよう。

徳島市内川内町の「十郎兵衛屋敷」は、以前から定期的に浄瑠璃の公演を行っている。少しここから距離は離れているが、時折出張して講演をしてもらうとか何らかのタイアップを考えるのも良いかもしれない。

天狗久資料館の管理者は天狗久顕彰会、実際はボランティアの人が交代で管理しているそうである。

「なかなか管理が大変です、続けていくのがやっと」そっと知り合いがつぶやいてくれた。そのとおりだと思う。「ぶらり散歩」の舞台裏を支えてくれているのは多くの地域のボランティアの方々と、ボランティアの方々を支えてくれるのは愛郷心である。ボランティア活動をやれば多くの人の愛郷心がより高まりさらに、外部への良い影響を与えるといったプラスの螺旋を描く方式が成り立たねばならないであろう。プラスの螺旋を描くための仕組みは何かを考え、早急にそれを作り上げる必要がある。放置すれば、時と共にボランティアの方々の活動も負のスパイラルを描く可能性がある。

3. 「ぶらり散歩」で変える郷土

○ぶらり散歩の理念：二つのぶらり散歩の現状

石光山で吉野川の黄昏に消えた山下老人が、最後につぶやいていたように、郷土を識ることは郷土を愛することにつながっていく。そのことがまず大前提であろう。一方、人には郷土の繁栄を願うという気持ちがある。それは郷土の魅力を増すことによって地域外の人に郷土を楽

しんでもらう、すなわち観光、ついで経済効果に結び付くはずである。

だが、「郷土を識り愛すること」と「郷土の繁栄」は、論理的には直接の関係はない。だが、この二つのことが有機的に結合していなければ、どちらに偏っても遅かれ早かれその考えは挫折するのではないか。特に私は「郷土の繁栄」「観光」に偏して力を入れた場合に生じるかもしれない、好ましからざる郷土の姿を想像し懸念する。こんなはずではなかったのという郷土の姿は、具体的にいろいろ想像されよう。

例えば、ギャンブルはその地域に見かけ上経済的潤いをもたらす。私個人は遊びとしてのギャンブルを無条件に否定するものではないが、そこには厳しい規制がなければ個人の精神をむしばむようなことも生じよう。それにギャンブルに依存している自治体財政などというのはあまりいただけない。以前、核物質のごみ処理場を誘致しようとした首長もいた。核汚染されたごみ処理の処理は、核エネルギーを使用する限りは必要作業である。しかし、自治体の経済的理由だけで住人の同意なく導入を決定するなど、言語道断である。

国府ぶらり散歩の項で触れたが、エコ・ミュージアムという理念がある。地域の時代に到達した町おこしの理念の一つだと思う。ただこの理念を実現していく際に、住民の郷土愛に根ざしての活動ということが強調されねば、魂の抜けたものなる可能性が高い。

この点に関し、ぶらり散歩の二つのケースはどうだろう。辻町の場合、まだ「郷土を識り、郷土愛を育む」ことに力を注いでいる段階であろう。各地域の運動は、まずこの理念を優先させるべきであろう。国府の場合、比較的には観光資源に恵まれている。また同じく比較的には、ぶらり歩きの環境は整備されている。今大切なことは、多くの地域住民を運動に巻き込み、かつ地域としてのストーリー作りを進めることであろう、まずは多くの住民を巻き込み、地域としての街ごと博物館を浸透させることであろう。

○地域の人と共に成長するマップ作り

地域の町おこしの活動における必須作業であるとともに、地域の人々の求心力を高める重要なしくみの一つはマップ作りである、必須の作業かもしれぬ。

辻町の場合、マップ作りはどのようなにされたかを簡単にまとめる。まず市の方から観光協会に話があり、辻町のボランティアガイドを組織したいということで、地域活動に関心のありそうな方たちに声がかかった。

一般的に、観光ボランティアは個人ベースに発生するのではなく、その大半は、地方自治体行政や関係団体（商工会議所・観光協会・旅館組合等）の音頭取りで作られている。

辻町の場合も自治体側からの要請で、専門の職員がマップ作りの手ほどきから指導し、ボランティアの有志が研修を受けたようである。その上で、ボランティアたちが協力してマップを完成し、また「ガイド台本」まで用意したという。私はこの過程が非常に重要だと思う。これによって郷土を深く知り郷土愛がより強まる、人の輪が強固になると考えられるからである。

全国的にみると、ボランティアガイドの動きは一斉に生じている。その中での経験をインターネット等で拾い読みすると、例えば、「ボランティア仲間同士での人間関係」、「行政との関係」、「ツアーの下請け化」、「本職ガイドとのすみわけ」、「無償の限界」等々の課題があるようではなかなか簡単ではないが、詳細は本論では割愛する。

○地域のストーリー作りの仕組みに関するキーワード

これまでの、いくつかのぶらり散歩をしてみて、仕組みつくりのために、あるいは地域に人を迎えるために、重要と思われる事項をキーワードとしてまとめてみた。

①説明板・案内版・町ナビ：町づくり仕組みの結節点

ぶらり散歩で、地域に足を運んだものにとつ

て一番ありがたいものは、案内板、説明版である。従来から、名所や史跡には、記念碑・モニュメント、案内板が設置されている。しかし、中にはペンキの剥げかかって読めないものもある。あっても、史跡の説明には物足りない物もあるし、また研究の成果で内容が変化することもありうるだろう。非常にメンテナンスが大事であるが、それを行い、管理する人やグループは大変な作業である。中には放置されてしまうこともあるだろう。設置する主体は、多くが教育委員会、観光協会、あるいは寺院などのその場所の管理者、あるいは、ゆかりの個人等々であろう。管理者ごとに困難な点があることは想像される。

私がよく通る徳島市の大道という通りの二軒屋近くの歩道には、かつて「林芙美子」にゆかりの場所であることを示す小さな標識が立っていた。個人が建てたものであろう。しかし、もっと詳しく調べてみようと思っているうちに無くなってしまった。朽ちてしまったのかもしれない。

東京ではこのごろ、その場所の歴史を示す標識が非常に増えた。ここには遠山金四郎の役宅がありました、などと土地の所有者が建てている等、個人やゆかりの店で立てる物も多い。西洋では「ここがベートーヴェンの住んでいた部屋」とか壁に記してあるのをよく見かけるが、建物が長期間保存されるのでやりやすいであろう。

先日若狭に遊びに行った時のことである。街道沿いの宿場町熊川宿は非常によく説明板が設置されていた。写真に撮っておいたが、感心したのはQRコード(二次元バーコード)が記入されていることである。現代では多くの人がスマートフォンを携帯している。それを使えばさらに詳しくその場所の解説が簡単に得られ、至極便利である。

例えば、その日は雪が降っていたが、町筋を歩いていると白川神社というのがあった。そこには藩主酒井忠勝の寄進とか簡単に述べられている。看板の隅っこにQRコードが付いている。

へー、さすが熊川宿と感心しながら、早速アクセスしてみた。すると、どうやらここは、奈良東大寺二月堂のお水取行事に水を送る小浜の鵜の瀬にある白石神社を分霊したものらしい。それではお参りしておこうと、雪の中にもかかわらず階段をのぼって参拝する、などということにもなる。

だいたい若狭小浜地区は、ガイドシステムのIT化が進んでいるように思われる。出発前にガイド本からダウンロードした「おばま お散歩ナビ」は、中で食べ物屋を探すのに重宝した。お正月なので休業中が多かったのでおさらだ。各地区とも観光客を呼び込もうとするならば必須だ。解説資料としては「ぶらり散歩」には少し物足りないが、その気さえあればいくらでも補充・レベルアップが可能なはずだ。

②ボランティアガイド：町づくりの触手

ボランティアガイドは外部からの観光客へのサービス・おもてなしのために組織されているのだが、それ以上の効果を生み出している。もっとも大きいことは地域住民の愛郷の意識を高めることである。それは隠れている文化遺産を発掘すること、地域文化のストーリー作りを主体的に担う。それらの作業は専門家とともに動くボランティアの組織が必須的に有効だ。いわば地域文化起こしの触手といえる。

③町ぶらり活動の結合：組織の連合と情報の一元化

案内ボランティアは観光地ごとに発生したものもあるし、町おこしのために行政が指導して結成されるものもある。そのレベルは多様である。観光的効果を期待する観点からも、その地域の文化遺産は限定されており、そこを案内するだけのボランティアでは、集客力は弱い。必然的に面への発展ということが考えられる。

本論で「ぶらり散歩」を試みた辻町付近では、すでにガイドグループが存在して活動し、また統合の動きが始まっていると聞く。辻町のあと官営のたばこ工場を有することとなった池田、古くからの信仰対象箸蔵寺、平家の落人伝説や

蔓橋を有する祖谷、子啼き爺で一躍有名になった妖怪の里山城、他に三好市一帯を特にジオパーク的視点でガイドするグループも準備されている。(ジオパークといえば那賀町の坂州不整合はもっと知られても良い)。大歩危小歩危の船下りは、ラフティングの大会があったり、徳島インバウンドの原動力でもあり、観光誘致の優等生である。ここにあげた地域は観光地としての発展度合い、その資源もまちまちであろう。だが統合の動きは、今後是非強力に推進すべきである。

お互いに経験を学びガイドグループとしての成長が加速されるであろうというソフト面もあるが、案内板といったハード面でもそのメンテナンスから必要である。メンテナンスというのは、説明・解説はその地域の文化の発掘が進行するのにあわせ、またその地域のストーリー性が増すにつれて、刻々とかわっていくべきものだからである。それを経済的にも可能にするのはITを利用した管理しかない。

④ストーリー：地域文化に必要なのは郷里のストーリー性

ぶらり散歩をしていると、しだいに気が付くのは、人間はストーリーを求めていることである。もちろん天然の自然が美しいだけでも観光資源になりうるし、美しい故に故郷を愛する、郷土愛にそれが結びつくということはある。しかし多くの場合、そこに人間社会、人間の生き方がからまったストーリーがあることがその土地に対する愛着を覚えさせる。それは地域の住人だろうが外部からの観光客でも同じである。

ストーリーは一口にいうとコンセプトのようなものであるが、その地域にまつわる歴史・文化・風土すべてをどのように捉え語れるか、そのことを意味している。人間はストーリーのある場所が好きなのである。たとえそれが架空のものであっても、脇町のオデオン座に寅さんが立ち寄っただけでも、そこを訪れる。伝説でも同じだ。ここで義経が腰掛けたと言うだけで、名所になりうるのである。

しかし、伝説にとどまっている限りは、なかなかそれは広く普及するものではない。ストーリー化が必要なのである。よい例が産業遺産であろう。世界遺産になった富岡製糸工場跡は、日本近代化黎明期に重要な役割を担ったというストーリーが認められ、世界遺産に登録され、またそのことがストーリーとして発信されることで、はじめて多くの人々が訪れるようになるのである。徳島は情報の発信が下手だと自ら認識していることが多いようである。しかし、多くの場合、発信が下手という前に、発信すべき内容としてのストーリーづくりができていないのではないか。

郷土愛、郷土振興に必要なのは、まず郷土のストーリーを地域の人々が共同幻想の空間として作り上げ、認識しあうことである。

⑤説明・案内板は仕組みとストーリーづくりの結節点

ストーリーづくりに最も適している仕組みがある。本論の中心モチーフである、説明案内板とボランティア組織である。この二つを重視してコトを進めればよい。案内ボランティア組織に関しては、すでに日本中で組織化が種々の方式で進行している。願わくば地域ごとの統一を進めることによって、より効率的に地域のストーリーづくりという方向を考えてほしい。その場合、方向決めの音頭取りは何処がとるのが課題であろうが、運動が活発な間は自然と最良の方針に淘汰されていくであろう。その間にしっかりした理念とシステム造りをボランティアの連合組織が作っておくことだ。

今もっとも統一した組織を要求されているのは、ボランティアの方ではなく、むしろ、説明・案内板を一括管理する組織である。今までは、説明・案内板は枝葉末節の問題として考えられていたのではないだろうか。それらを設置・管理するのは地域の教育委員会か観光協会、その場所の保有者等々多様である。これらは一度設置されたら内容の改定も含めメンテナンスを簡単にはできないのが現状であろう。設置費用、管

理経費もままならないはずである。しかし、行政を含めた設置管理する主体が協力してIT技術を用いれば、現段階においても膨大な数量の地域の説明・案内板を、大した経費をかけずに内容のメンテ管理ができるはずである。

すでに、実行している観光地や地域があるように、まずは現状の説明・案内板にQRコードを貼り付けるだけで良い。そのアプリケーションの作成とメンテナンスは従来の管理主体が協力すれば、よりレベルの高い内容のものがトータル的には低コストで実現できるのではないか。現実には各管理主体がかけているマンパワーと費用は年間はずかかもしれぬが、なにしろ数が多いので検討する必要がある。何よりもそれによって説明・案内の質が数段向上することは、日を見るよりも明らかである。さらに本論が主張したいことは、その内容を作りあげていくのを地域のボランティア案内と地域観光団体、行政、メディア、大学等の協力で作業することである。それによって地域文化の発掘は進みストーリー性は増していくであろう。関係者に強く提案したい。

今回あまり触れる余裕がなかったが、地域メディアと大学等を加えたのは、地域文化のストーリー作りと発信にはこれらの機関の協力が必須だからである。

おわりに

- ・現代における郷土愛育成とまちづくりの実体を街歩き風に考察した。
- ・いくつかのキーワードとして今後の重要な課題を示した。
- ・持続して発展するシステムの構築と発信のために説明・案内板のIT化が急務である。

主な参考書

- * 山下待夫『辻風土記』 昭和 10 年、水石社
- * 石躍胤央編『街道の日本史 44：徳島・淡路と鳴門海峡』 2006 年、吉川弘文館
- * とくしま地域政策研究所編『吉野川事典』 1999 年、農山漁村文化協会
- * 谷口秋勝『阿波の民話：炬端の夜ばなし』 昭和 61 年、祖谷秋月堂
- * 見田宗介『現代社会はどこへ向かうか』 2018 年、岩波新書
- * 佐那河内村『ふるさと佐那河内（民俗と民話）』
- * 天狗久顕彰会『初代天狗久』 平成 5 年
- * 編纂委員会編『角川日本地名大辞典 36 徳島県』 平成 3 年、
- * 小林浩『地域観光ガイドの活動実態とその意義に関する研究
－特に教養観光の推進に関連して－』 2003 年、千葉大学地理学修士論文

西池氏裕氏略歴

1944 年生
1974 年 4 月 川崎製鉄入社技術研究所
2000 年～2004 年 東京大学先端科学技術センター客員研究員
2006 年 4 月 財団法人徳島経済研究所技術顧問（現）
2007 年 8 月 徳島県経済成長戦略アドバイザー（兼）
2008 年～ ひまわり俳句会主宰
2011 年 9 月 徳島県教育委員長（～2012 年 8 月）